

第4章 考 察

第1節 円形低墳墓出土の古式須恵器について —とくに甕・壺（もしくは大型壺）を中心に—

かつて筆者は岩清水遺跡の本報告前に何度となく、本遺跡の円形低墳墓から出土した土器群について考察する機会を得た^{1・2)}。そこでは1号円形低墳墓から出土した須恵器である壺及び高杯をおおむねTK23型式に相当するものであることを述べ、それらに共伴する土師器群もその年代に矛盾がないとした³⁾。

本遺跡の1号・2号墓周溝部からは、小型壺・高杯のほかにも甕・壺（もしくは大型壺）等の破片が出土し、この時期の須恵器群の組み合わせを知る上で一つの貴重な資料になり得ると思われる。既に報告した考察においては、出土状況や器形の明確であった1号円形低墳墓出土の壺・高杯に焦点を当てて論を進め、遺構の年代決定に至った。今回の本報告においては、これ以外の破片資料である甕・壺についても資料化することができた。甲府盆地出土の古式須恵器を概観すると、この時期の甕・壺（もしくは大型壺）の資料は数が少なく、またそれぞれの段階を見てもその変遷を追うことは困難である。ここでは甲府盆地出土の甕・壺に、今回出土した新資料を加えることでこれらの資料の集成を行ってみたいと考える。

本報告で述べたように、1号円形低墳墓周溝部では周溝全体に壺・高杯の破片が散在するように出土した。本遺跡に先行する東山南（A）（B）遺跡^{4・5)}でも、これらと同様の須恵器の出土状況が確認できるため、葬送儀礼の一形態ととらえることができる。2号円形低墳墓では、甕・壺（もしくは大型壺）が出土したが、全体像を知ることができるのはほとんど皆無であり、1号円形低墳墓と同様の出土状況を呈するのかどうかは残念ながら不明である。

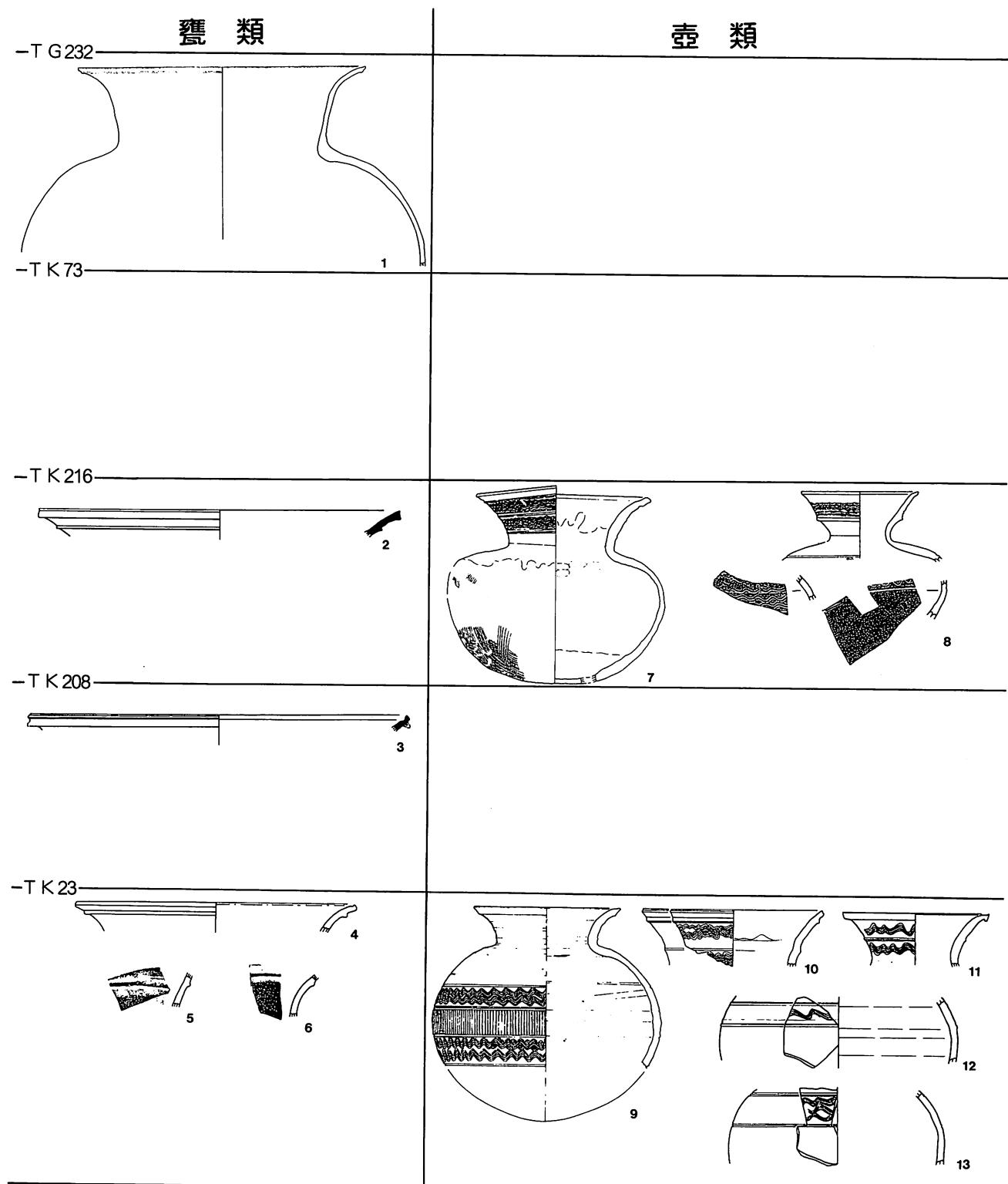
次に2号円形低墳墓出土の資料について、もう少し詳細に観察したい。現在のところ2号円形低墳墓周溝部からは、甕約7点、壺（もしくは大型壺）約7点が確認できる。また固体数を明確にできない甕の胴部破片が多量に存在する。このうち、第39図28～35の甕は、口縁部から底部までが観られ、それぞれ特徴をよくあらわしている。28・29・30は口縁部及び頸部である。外面には口唇部のすぐ下部に、一条のまるい凸線が巡る。31・32から頸部は若干直に立ち上がり、その後上部へ向かってラッパ状に開くものと思われる。口縁部から頸部までは、ロクロによるヨコナデで調整し、胴部から底部にかけては内面はタタキで、外面はナデにより調整されている。色調の異なるそれぞれの個体においても、調整は統一されていることから、これが一つの甕の形態であることを知ることができる。一方第39図21～27は甕（大型壺）である。口唇部内面はつまみ上げられ、溝状に若干くぼんでいるものも見られる（22）。口縁部外面のすぐ下部には、凸線が巡るものもある（21）。また頸部中央には、やはり凸線が巡り、それが上段と下段を区画する凸線になっている。この凸線を境に上段と下段にはそれぞれ櫛描波状文が施される。胴部は内外面ともにナデにより調整される。26は内面がハケ状の工具でヨコナデを施している。胴上部は上下2本の沈線で区画され、区画内には櫛描波状文が胴部を一周する文様帶が見られる。

次に以上のような特徴を考慮した上で、甲府盆地内の資料を概観してみたい。これまで当該地域では、小型壺等と比較して、甕及び壺類の出土例は非常に少かった。とくに前者はわずかに口縁部が見られる程度で、その全体像を把握することは難しく、また形態の変遷を追うこともできなかったといってよい。第44図はこのように稀薄であった甕・壺類に今回の発掘調査で得られた資料を加えたものである。甕類のうち、現在のところ最も古相を呈するのは東八代郡中道町の米倉山B遺跡第10号土坑出土のもので、TG232型式に位置付けられる。単独の出土であり、後続段階の出土例が今のところ見られることなどから、この段階が土師器変遷のどの段階に符合するものなのかが一つの課題になっている⁶⁾。御坂町二之宮遺跡⁷⁾の259号住居跡から出土した須恵器甕口縁部は、土師器の様相から、中期中葉に位置付けられるものである。須恵器甕は小片であるが、口縁端部は面取りされ、内側はつまみあげられ、外側はシャープに張り出している。口縁下部には一条の凸線が巡る。

断面は三角形を呈し、非常にシャープな印象を受ける。TK216型式に位置付けられるものと思われ、共伴する土師器の年代とも矛盾ないものである。また二之宮遺跡西46号住居跡の須恵器甕口縁部は、やはり小片であるが端部を内側につまみあげる点では、前段階の形態を色濃く受継いでおり、口縁部のシャープさを若干欠くことを考え、二之宮遺跡259号住居跡のものに後続する段階のものと見てよいと考える。本資料をこれらと比較すると、全体的に形骸化の様相が色濃いが、各要所の特徴を忠実に模倣しようとしている様を看取できる。口唇部内側はやや丸みを帯びているものの、若干つまみ上げている様子を窺うことができる。一方口縁部外側は丸く処理されている。口縁部下段の凸線はやはり断面が丸く、凸線・頸部とともにヨコナデにより調整されている。確認した3点全てにこれらの特徴が見られることから、これらがこの段階の諸様相であると認識することができる。壺（大型壺）はその初現が甕よりかなり遅れて登場するが、全体像を窺うことができる資料が存在する。東山南（B）遺跡2号墓の周溝部からは、甕2点（7は大型壺の可能性がある。）が出土しており、現在のところ盆地内で最も古い例になっている。7は口縁部及び胴部に施されるハケがまるで1本1本引かれたかのような様相を呈し、極めて初期的な印象を受ける。7・8ともに口縁端部や頸部を巡る凸線等、甕と同様非常にシャープな印象を受けるものである。9は中巨摩郡櫛形町六科丘古墳墳頂部より出土したものである。胴部を巡る文様帶はあまり例を見ないものであるが、櫛描波状文を観察すると形骸化した様相が色濃い印象を受ける。本資料（10～13）は口縁部及び胴部の資料のみで、全体像を知ることのできるものは存在しない。口唇内部にツマミアゲを意識しているものの、やや丸みを帯びる。11は口縁部外面が反り返り、より古式のものの模倣であるような観を受ける。いずれも頸部に調整を兼ねたヨコナデを施すことで、上段と下段に区画する凸線を浮上させ、表現している。しかし10・11ともに細く、貧弱である。頸部上段と下段にはそれぞれ櫛描波状文が描かれるが、櫛描の密なものや閑散としたもの、幅の細いものや太いものなど、形骸化した印象が強い。胴部は口クロを用いたナデにより調整され、一部ケズリのような痕跡も見られる。8の底部には一部タタキも見られるが、本段階の資料にはタタキによる調整は一般的ではないようである。胴上半部を巡る櫛描波状文は頸部と同様、形骸化している。これらの特徴は田辺編年⁸⁾のTK23型式段階に相当するものであると思われ、共伴遺物との矛盾もほとんど感じられない。

以上のように甲府盆地内の須恵器甕・壺類に本遺跡の新出の資料を加えて集成を試みた。依然として資料は少なく盆地内の当該期の土器様相は混沌としている状況は変わらない。しかし古式須恵器が徐々に増加することで、時期が下降するのに伴って須恵器も形骸化する様相がさらに明かになった。そして中期中葉から後葉にかけて、これらが波のように何度も亘ってたらされる状況がより顕著になった。ただ、盆地外からもたらされるものであり、当時においてはまだまだ貴重な文物の一つであつただけにそれを手にできる人物は限られた存在だったに違いない。そして曾根丘陵の円形低墳墓に葬られている人物は、それらを手にできる力をもっていた人物であったと思われる。それらの人物が甲府盆地の中でどのような役割を担っていたのか、当時の社会の仕組みがどのようなものだったのかを知る手がかりを須恵器を通して考えていくことが次の課題といえるのではないであろうか。

- 1) 石神孝子 1998 「甲斐における古墳時代中期の墓制について」『研究紀要』14 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 2) 石神孝子 1999 「甲斐における初期須恵器の展開」『山梨考古学論集IV』 山梨県考古学協会
- 3) 1) の文章中では、1号円形低墳墓から出土した壺・高杯についてTK208型式段階のものと位置付けているが、脱稿後陶邑出土の当該期の資料を実見する機会を得、比較・検討の結果からTK23型式段階に位置付けるほうがより適切であるとの結論を得た。そのため、2) ではこれらの資料の年代をTK23型式に改めた。
- 4) 小林広和ほか 1993 『東山南（A）遺跡』 山梨県教育委員会
- 5) 末木健ほか 1991 『東山（B）遺跡』 山梨県教育委員会
- 6) 石神孝子 2000 「10号土坑出土の須恵器甕について」『米倉山B遺跡』 山梨県教育委員会ほか
- 7) 坂本美夫ほか 1987 『二之宮遺跡』 山梨県教育委員会
- 8) 田辺昭三 1979 『須恵器大成』 角川書店



1. 米倉山B遺跡10号土坑 2. 二之宮遺跡259号住居跡 3. 二之宮遺跡46号住居跡 4~6. 岩清水遺跡2号墓
 7~8. 東山南(B)遺跡2号墳 9. 六科丘古墳 10~13. 岩清水遺跡2号墓

第44図 甲府盆地出土須恵器(甕・壺類)編年案